

改革派教会の伝統と改革派教会の礼拝

安田 吉三郎

序

「改革派教会」とは、スイスの宗教改革者ジャン・カルヴァンの神学思想および教会統治と礼拝の実践を、忠実に継承、ないしその強い影響下にある諸教会のことである。一般に「長老派」「改革派」という名称を冠した教派名で呼ばれている。教派の信条としては、ウェストミンスター信仰告白、同大小教理問答書、ハイデルベルク信仰問答書、ドルト信条、ベルギー信条、ジュネーブ教会信仰問答書、スコットランド信仰告白、フランス信条、第二スイス信条等を採用している。教会統治の形態は長老主義である。礼拝の形式には、ローマカトリックのミサの否定と聖書の朗読と説教の重視という点では共通項があるが、それ以外には特に強力な統一的模式がない。⁽¹⁾

「改革派教会」は、プロテスタント宗教改革の結果生まれた教会であるが、同時にイエス・キリストの見える公同の教会の枝であることを、信条、教会統治、礼拝のおのおのにおいて表明している。宗教改革諸信条の他に、公同教会信条（使徒信条、ニケヤ・コンスタンチノポリス信条、カルケドン信条、アタナシオス信条）を採用する。教会統治に関しても、聖書に遡ることは勿論、絶えず二―三世紀の教会統治の理論と実際が省みられている。礼拝においても、カルヴァンが二―三世紀の教会の礼拝に立ち帰ろうとしたように、キリスト教会の正しい伝統を評価して取り入れようとする姿勢が見える。このエキュメニズムの要素をどれだけ取り入れるかをめぐって、改革派・長老派の姿勢には多様性が見られる。

日本におけるプロテスタント教会の主流派となった旧日本基督教会は、改革派・長老派の伝統のもとにあったが、それはヨーロッパ大陸に起こった宗教改革諸教会が新大陸アメリカに渡り、そこで独自の変化を遂げて後に日本に伝わったものである。特に戦後において、日本基督教団を離脱して独自の教派を形成した日本基督改革派教会、日本基督教会、および日本基督教団の中にあつて改革派・長老派の伝統に立とうとするグループは、日本宣教初期の影響を伝統として維持しつつ、教会の成熟とともにヨーロッパ大陸における宗教改革のルーツに遡ろうとし、さらにキリスト教会の伝統そのものに目を向けようとするようになった。⁽²⁾

礼拝に関していえば、旧日本基督教会が採用した礼拝の形式は、いわゆるピューリタンの簡素なものであった。その神学的な表明は、ウェストミンスター神学者会議において制定された「礼拝指針」に遡る。そこでこの歴史的文書の検討から始めるのが妥当である。⁽³⁾

一、ウエストミンスター神学者会議と「公的神礼拝の指針」

(一) 作成の経緯

ウエストミンスター神学者会議（一六四三年―一六四九年）の意味を正しく理解するためには、イングランドとスコットランドの宗教事情、特にその宗教改革の歴史の詳細を知る必要があるが、松谷好明著「ウエストミンスター神学者会議の成立」にゆずる。⁽⁴⁾ 国王軍との戦いにおいて不利な状況にあった議会は、スコットランドの援助を要請した。その条件としてスコットランド側から要求した「厳肅な同盟と契約」を議会は受け入れた。これにより神学者会議の性格は、イングランド教会の改革という枠を越えて、イングランド、スコットランド、アイルランド三国の信仰告白、教会政治、礼拝の統一を目指す文書の作成を目標とするようになった。これらの中で最も早く作成されたのが「公的神礼拝の指針」であった。これが真先に取り上げられた理由は、必要に迫られていたということが第一であり、神学者間の意見の相違が比較的小さいということもあつた。一六四四年五月から七ヶ月かけて礼拝指針全体の討議を終えて完成し、議会に送付した。議会は一六四五年一月にこれを承認した。スコットランド教会総会と同国議会は同年二月には無修正で承認した。

(二) その内容

公的神礼拝の全文は、序文と補遺の他に一四項からなる簡潔なものである。その項目は次の通りである。

序文

一、各個教会の会衆の集まりについて、および公的神礼拝における会衆の行儀作法について

二、聖書の公的朗読について

三、説教前の公的祈禱について

四、御言葉の説教について

五、説教後の祈禱について

六、礼典の執行について、および先ず洗礼について

七、聖餐（コミュニオン）の祝いについて、すなわち、主の晩餐の礼典について

八、主の日の聖別について

九、神の前における結婚の式

一〇、病者の慰問に関する事

一一、死者の埋葬に関する事

一二、公的で厳肅な断食に関する事

一三、公的感謝日の遵守に関する事

一四、詩編を歌うことについて

補遺 公的礼拝の日と場所のこと

(三) 「公的神礼拝指針」の特徴 ―― 「序文」を中心に ――

イングランドにおいてもスコットランドにおいても、宗教改革は礼拝の改革であったから、カトリック教会の礼拝から非聖書的な要素を除いたリタージを作成した。「序文」は、宗教改革により、何よりもラテン語による礼拝が

廃止され、公的礼拝がそれぞれの国語で祝われるようになったこと、特に聖書がそれぞれの国語で朗読されるようになり、人々が大きな益をうけるようになったことを評価する言葉ではじめる。それにもかかわらず、なお改革を押し進める必要があるのは、イングランド教会の礼拝様式には、多くの改革者のつまづきとなる要素が除かれないままで、この様式への服従がすべてのイングランドの牧師たちに強要されたからである。そのために、この礼拝様式への服従を拒む多くの改革主義の牧師と信徒を危険にさらしたのである。他方、カトリックの側では、イングランド教会の「祈禱書」による礼拝は彼らのものと変わりが無いと言ひ、改革の必要を否定する口実としている。さらにもう一つの問題は、「祈禱書」によって礼拝すると、そこに書かれている祈りの文句をそのまま唱えて満足するような、怠惰な牧師を作りだしてしまい、また他方では、礼拝の次第をめぐる論争が果てしなく続くために、牧師職そのものに嫌悪を覚える人が多くなった、ということである。

ついで「序文」は、この礼拝指針を新たに作成する意図は、目新しいものを作って最初の宗教改革者の立場を否定することを目指しているのではなく、彼らも喜んで同意するようなものを今の時代の中に、さらなる改革を押し進めるために作成するのであると言う。そのことは、自分の良心の満足のためであり、かつ改革派諸教会の期待に応え、イングランドの信仰深い人の願ひに応えるためである。また「厳肅な同盟と契約」を結んだ三国の礼拝の統一を推進するためもある。

そして、最後の部分で「序文」は、「指針」において配慮したこととして次の四つの点を挙げている。ここに「指針」としてこの文書の性格が明瞭に表れている。

① 各規定（オーデイナンス）⁵⁾は、神が御言葉において明らかに定められたものを提示する。

② それ以外のことは、神の御言葉の一般的法則に合致する限りのキリスト教的分別の法則に従って提示するよう努める。⁶⁾

③ 以上の意味することは、神礼拝の一般項目、祈禱の内容と目的、公的礼拝の他の部分は、すべての人に知られており、神奉仕すなわち礼拝の本質をなす事柄において、全教会の同意が存在するようになること、である。

④ 「指針」であって「祈禱書」ではないので、牧師たちはこれを用いることにより、教理と祈りにおいてふさわしい健全さを保つ助けが与えられる、と同時に、各自の賜物をより良く開発してそれぞれの群れのために最善をつくすように努力するように導かれ、それぞれの時代に應じて必要な変更をくわえてゆくように努めることができるようになる。

「序文」の読み方はこの文書の評価をする上で極めて重要である。後藤憲正は「改革派教会の礼拝」の中で「典礼の経験の乏しい独立派の影響の強いこの指針」「一六四五年スコットランド教会はこれを一応受け入れましたが、そのままではなく、取捨選択の手を加えました」「イングランドでは長老派以外の教会では直ぐに放棄された」というこの指針そのもののいかかわし「このウエウストミンスター礼拝指針のために教会の礼拝は貧しく、乏しくなってしまう。……このようなスコットランドの礼拝は全キリスト教会で最悪のものとして評されます」と低い評価をしている。⁷⁾

「指針」と、後の長老派教会の礼拝の貧困とを後藤のように直接結びつける見解は、「序文」の③に対する無理解によるものである。すなわちこの「指針」はカルヴァンがジュネーブ教会の礼拝のために作成した礼拝式文「祈禱の様式」（一五四二年）をはじめ、⁸⁾スコットランド教会が使用していたノックスの礼拝式文とその改定版であるThe Book of Common Orderにおける礼拝の式次第とその要素は、全教会共通のものとして前提されているといっ

てよい。カルヴァンやノックスのリタージが、後の改革派・長老派教会の中で忘れ去られた原因は、「指針」そのものにあるのではなく、「指針」の「序文」の精神を受け継がなかった後世の教会の責任である。⁹⁾ 「指針」の趣旨を「序文」によって確認した上で、改革派・長老派の礼拝論において特に問題とされた点を以下に考察することにする。

二、御言葉の朗読と説教

(一) 御言葉の朗読

宗教改革は礼拝の改革であった。礼拝とは神の民に対する神の行為であり、神に対する神の民の奉仕である。¹⁰⁾ それは礼拝に集まる神の民全員のものである。神の民の中の特別な部分である司祭が、祭壇において営むことが礼拝の主要な要素となり、一般の神の民はそれを見物しているだけの礼拝は、正しい礼拝とは言えない。宗教改革において改革者を取り組んだ第一のことは、礼拝における聖書朗読と説教の回復であった。ユステイノスの言葉から知りうる初代教会の礼拝は、御言葉と礼典のバランスを保ったものであった。¹¹⁾ 中世ローマカトリックの礼拝は、礼典の方に比重がかかり、御言葉の部分が異常に痩せ細っていた。宗教改革は、そのバランスを回復しようとする運動であった。

聖書はラテン語ではなく、それぞれの国の母国語に翻訳されたものが朗読されるべきであった。「指針」が聖書の公的朗読について規定していることは次の通りである。

① 御言葉の朗読は公的礼拝の一部であり、神により聖別された手段である。

② 朗読は牧師、教師あるいは、中会の認める教師の候補者が行う。

③ 朗読は最良の翻訳により母国語で行う。

④ 通常は一回に旧新約それぞれ一章ずつを朗読し、正典書をすべて繰り返し朗読すること。しかし特に大切な書、例えば詩編などはしばしば朗読すること。¹²⁾

⑤ 朗読した箇所について説明が必要と判断される時は、礼拝全体の時間のバランスを考えた上で行う。

⑥ 字の読める人は個人的にも読む。読めない人は読むことができるように努力する。聖書の所持を奨励する。

(二) 説教

改革派・長老派の伝統の中で、説教は恵みの手段として極めて高く評価されてきた。「指針」は「御言葉の説教について」の項を、「御言葉の説教は、救いに至らせる神の力である」との力強い宣言で書き始める。ウェストミンスター小教理問答八九は「御言葉はどのようにして救いに有効とされるか。」と問い、「神の御霊が、御言葉の朗読、特に説教を、罪人に罪を自覚させ、回心させ、また信仰によって救いに至るまで、きよめと慰めのうちに彼らを成長させるために有効な手段とされるのである。」と答える。ここに言い表されている説教についての高い評価は、カルヴァンとその系統の改革派諸信条に共通の理解である。特に「御霊」の働きへの言及が大切である。

同じことは、改革派の説教観の伝統の中にあるピューリタンの中で「言葉の sacrament」 verbal sacrament という言葉で言い表された。「言葉は肉となり——イメーシにおけるように、見えるものとしてでなく、パンと葡萄酒におけるように、味わえるものとしてでなく、香の煙のように、嗅ぐことのできるものとしてでなく、聞くことにおいてである。そして言葉はわれわれの間に宿る。説教は sacrament である。」¹³⁾ 説教という手段をもって、神は

靜的に臨在されるだけでなく、語りを通して行為される。説教者を通して、神は教会の現在の状況の中で直接的に語られるのである。

御言葉の説教職の重要性のゆえに、「指針」は説教者に「一般の信者にまさる分別と心の働き」を備えていることが期待する。しかしながら、いかに優れた賜物を与えられた人であっても、罪人の一人に過ぎない者が神の言葉を語り得るためには「聖霊」の働きが不可欠である。礼拝において、聖書朗読と説教の前に聖霊の照明を祈る習慣は改革者によって始められたものである。マルティン・ブツァーによるストラスブル・リタジーの中に表れ、カルヴァンもジュネーヴ教会のリタジーにこれを取り入れた。

「指針」では、説教の前の公的祈りの中で聖霊の照明が祈り求められる。「わたしたちは、過去においては無益な聞き手でありました。そして今も、靈的洞察力を必要とする神の深い事柄、すなわちイエス・キリストの奥義を、自分の力だけでは、そうあるべきほどに受け取ることができません。それゆえに、益を受けることができるように教えてくださる主が、恵みの御霊を、その外的手段とともに、憐れみをもって注いでくださるよう祈ります。それにより、われらの主イエス・キリストと、主にあるわれらの平和に属することを豊かに知り、ついに、いかなるものも、主イエス・キリストと比べれば、ちりあくたにすぎないものと見なすことができ、また、やがて啓示されるべき栄光の最初の実を味わうことにより、主イエス・キリストとのより一層豊かで完全な交わりを求め、主がいますところにわたしたちもおおり、その右手とともにとこしえにある喜びと楽しみを、十分に喜ぶことができるように祈ります。」

神の御言葉である聖書の朗読と説教を語ることの重要性とともに、これを聞くことの重要性もまた強調せられる。神礼拝において、神の恵みの手段として神から民へと至る部分は、御言葉の朗読、説教、聖礼典である。これにた

いする応答は、民の神への感謝と讚美であり、礼拝の要素としては、祈り、讚美を歌うこと、献金を献げることである。一応このように分けることができるが、神から民への恵みの手段の中にも応答の要素が存在する。御言葉を聞くということは、決して受け身の姿勢でなされるべきではない。ウェストミンスター小教理九〇は、「御言葉が救いに有効となるためには、御言葉を、どのように読み、どのように聞かなければならないか。」と問い、「御言葉が救いに有効となるためには、わたしたちは、熱心と準備と祈りをもって御言葉に聞き、それを信仰と愛をもって受け入れ、わたしたちの心のうちにたくわえ、生活において実践しなければならぬ。」と答える。「指針」においても、説教前の祈りにおいて、同じことが次のように祈られる。「主が聞くものの耳と心に割礼を施し、彼らの魂を救うことができるように植えつけられた御言葉を、へりくだって聞き、愛し、受け入れることができるように祈ります。彼らを御言葉の良い種子を受け入れる良い土地としてくださり、サタンの誘惑、世の心づかい、自分自身の心のかたくなさ、その他、益を受け、救いに与かる聞き方を妨げる、いかなるものに対しても強くしてくださるよう祈ります。かくして、キリストが彼らのうちに形づくられ、生きたまい、彼らのすべての思いがとりことなつてキリストに服従させられ、彼らの心が、とこしえに良い言葉と業において、堅固にせられるように祈ります。」この祈りとともに説教を聞く会衆は、サクラメントとしての説教の業とともに与かる重要な要素であり、決して受け身の観客たりえないのである。